

ベトナム旅行記（カンボジア&ミャンマー編）

苧坂達文

カンボジアは言うまでもなくアンコールワットだ。首都プノンペンとは遠く離れた南方のシェムリアップにある。ここへの直行便はなくベトナムのハノイ経由で行った。代表的な遺跡がアンコールワットと近くにあるアンコールトムでこの見物にはガイド付きのツアーを利用した。アンコールトムでは老朽化した遺跡を日本人のボランティアが修復工事を行っていた。



アンコールワットの遠景



修復工事現場

午前と午後に分けてアンコールトムとアンコールワットの遺跡巡りを行ったが、アンコールトムは見どころは多いがまるで夏山の登山みたいなタフなコースである。またアンコールワットの最上部に長いはしごでのぼる寺院があり、地元の老若男女は参拝の為、皆軽々と登っていく。わが仲間たちも高所恐怖症で躊躇している私を見捨ててとどンドン登って行くので、「上だけ見て登れば怖くない」と意を決して登ったものの上から振り返るととんでもない景色が目に入る。

ここでも激しいスコールに出会い登った人は皆上で雨宿り。狭い高所で1時間近く監禁され、その間、降りるときのことを想像してずっと恐怖に耐えていた。



写真左から恐怖の梯子段。真ん中は激しいスコール。右は最上部で雨宿りする人々。

アンコールワットの入り口周辺には子供がたむろしていて、「ダラー、ダラー」と言って施しを求めてくる。皆で分けろというつもりで1ドル札を渡したのだが、皆がそれぞれ自分にもくれと言わんばかりにまとわりついて来た。追い払ってくれたガイドさんから叱られたのは、この国では子供でも

自分で金を稼がねばならない。施しを受ける味を覚えたら働かなくなる。ということだった。

アンコールワットの内部



結婚式をあげるカップル



アンコールトム



生木の中の仏像



シムリアップの夜はナイトマーケットエリアがあって観光客で賑わっていた。驚いたのは路上でマッサージをおこなっていた。



こちらは明るいうちに探したカンボジア宮廷料理の店。この地域では雷魚が貴重品ということで雷魚の入ったコースを選んだ。雷魚とわかるような形状はなく煮物中心の田舎料理だった。ワイン(チリ産)も飲んで一人 2000 円程度。この時期のベトナムの半額位か。ワイン選びとオーダー全般はO氏、料理選びはF女史の出番である。



ここでも店に入った途端に激しい雨。雨宿りを兼ねたディナーとなったが、せっかくのガーデン席は使えなかった。

朝の散歩で見た光景



ここも露店で朝食。バイクで集まって来る客。



昨夜の賑わいがウソのような朝の街
40年前の歌舞伎町の朝のようなたたずまいだ。



寺院では6時台には既に若者が集まって勉強中。僧侶が先生のような。もちろん学校は別にある。これ日本の塾に該当するものだろうか。早朝からの勤勉さに感心した。



カンボジアの仏像

象のタクシー

プノンペンへ行ってないのでカンボジアの国情は語れないが、シェムリアップはリゾート地のように外国人観光客で賑わう町だ。食事から帰ってタクシーを降りるとき、部屋の前でホテルマンが立っていてポン引きされた。5000円程度だったように記憶する。勿論断ったが、泊まったことのあるベトナムの各都市、ミャンマーのヤンゴン、上海、台湾等では一度もなかった。また名物のアンコールクッキーは日本人女性が現地に会社を作り住民を雇用して作っているそうで観光地や空港土産でも売っているが、必ずしも衛生的ではないようだ。気をつけたい。

次にミャンマーのヤンゴンについて。この国は135もの民族が暮らしているそうだ。軍事政権に代わりアウンサンスーチーさんが民主化を進めているが困難は想像に難くない。美女が多いのもこの国の特色。これも多民族と関係しているのか？



バゴー行きのオプションツアーの添乗員によるとかってイギリスの植民地だったことから英語が盛んで小学校1年生から英語の授業が始まるそうだが、義務教育ではなく貧しい家庭は学校

にやれないそうだ。国民の90%が仏教徒の国なので寺院がその受け皿となって寺院で修行させ、勉強も教えるそうだ。また僧侶になる義務もないそうで、働ける年代になれば僧侶をやめて就職する人も多らしい。



寺院の昼食風景。食卓は一汁一菜とライス。テーブル毎に置かれたボウルから取り分けて食べる。貧困家庭の子供には食住と知識が与えられる場所だ。ただし親とは別居生活となる。修行僧は各所から大きな托鉢をもって一列に並んで入って来る。見学者は廊下に待機して前を通る僧侶の托鉢にご飯や菓子類、金などを投げ込んでいた。親たちもいるそうだが、ご飯と菓子はあらかじめ寺院が準備して並べておいたものだ。お布施さえもお仕着せのようだ。



ヤンゴンの大きな特色は幹線道路の渋滞である。空港からヤンゴンの中心街まで早朝、深夜なら30分だがラッシュ時間になったら2時間近くかかるという。勿論ツアーのようなトイレ休憩の場所もない。到着時間は早朝か夜が良い。私たちは平日の20時過ぎ空港着でダウンタウンまで1時間強かかった。ヤンゴン市街はかつて将軍の子息がバイク事故で亡くなった為、バイク禁止になっているそうだ。その為近隣他国でバイクに乗る階層が皆自動車なので台数が多い。しかもダウンタウンなどの居住地は駐車場がないため、道路の両サイドに縦列駐車していて一台通るのがやっつだ。

タクシーのシステムが面白い。運転手は殆ど英語はできないのでホテルやタクシー乗り場では必ず世話してくれる人がいる。タクシーにメーターは無く、乗る前に料金を決めるシステムだ。遠回りされても料金が増える不安もなく渋滞でメーターが上がって行く心配もない。ヤンゴンの観光地は分散しているので、歩いて行ける範囲は少ない。食事に行くにもタクシーに乗ることが多いのでこのシステムは歓迎だ。

観光地紹介の前に恒例の早朝散歩の景色を紹介する。



旧最高裁判所



街角の水瓶



独立記念碑

独立記念碑のあるマハバンドゥーラ公園では多くのグループが体操や踊り、気功のようなことをやっていた。日本人と見るとわざわざ自分達がやっていることの説明に来てくれた。



その公園に隣接する中心市街の寺院スレーパヤー(ヤンゴン中央駅に近い)



新旧の大型店舗を結ぶ歩道橋



ボージョ・アウンサンマーケット



向かいにある国民向けのスーパーとマンション。隣の高層ビルは最新の商業ビル。スーパーもある



昔からの商店街1Fは小売り店舗や飲食店。上の階は映画かんやカラオケ等。アウンサン政権で風俗店は一掃されたようだ。一門入るとこの様なあばら家(右の写真)も。テレビのアンテナか、屋上はみな大きなパラボラアンテナがついていた。宿泊地のダウンタウンから散歩できるのはこの辺りまで。ダウンタウンにはインド人と中国人が住んでいる区画がある。



シュエダゴン・パヤーの夜景(ホテルの屋上から)

昼間院内から すべての建物は金箔造



バゴの寺院。お釈迦様が複数いるという仏教。右は 1931 年の地震で落ちてきた建造物。ミャンマーはどの寺院も金箔が施されているが中はこのようなレンガ造りになっているようだ。バゴは現地で探したオプションツアー。HISで日本語のガイドをつけるということで申し込みに行ったが、渋滞で時間を浪費してしまった。最小催行人数をクリアしているということで我々4人だけ(今回はT氏が欠席の為)の専属ガイドとなった。ガイドさんは理系の大学卒で日本にも留学したエリート。今は結婚して個人で旅行会社の請負ガイドをやっているようだ。道中様々な観光情報を聞いたが明日は午前の便でホーチミンへ移動予定。わがままを言って一部予定を変更し、アウンサンスーチーさんが永年幽閉されていた湖畔の畔の故アウンサン将軍(スーチーさんの父)の別邸等へ連れて行ってもらったがそれ以上はもう時間がない。今まで気ままな旅を続けて来たが初めての

場所ではあらかじめ予約して最初にオプションツアーに参加して情報収集すべきだったと反省している。とにかくベトナムもカンボジアもミャンマーも日本人に親切だ。言語的にはベトナム語が一番発音が難しい。ミャンマーやカンボジア語はカタカナの発音に近いので言葉を覚えれば通じるし、聞き取れるような気がした。最後にその他の写真を掲載する。



シュエターリャウン寝仏(バゴー)



バゴー郊外の機織り工場



16世紀の王宮(バゴー)



柱に施された彫刻



剥げているが金箔に宝石を
散りばめたカップ



アウンサンスーチー邸



将軍ゆかりの湖上レストラン。



中は民族演芸とバイキング



お世話になったガイドさん。腰巻は多くの男女が纏っている。バゴの機織り屋さんもこの美しい布を織っていた。日本の和装のようなものか。ガイドさん曰く普段はパンツをはいていて仕事の時だけ使用しているそうだ。言い忘れたがミャンマーの寺院に入る時ははすべてはだして靴下も許されない。ミャンマー人は街中でもビーチサンダルのようなものをはいているので脱ぎ履きが簡単だが観光客は気をつけたい。ミャンマー旅行の際はサンダル必携だ。ただしトイレ等はかなり足元の悪いところにあり裸足で歩くには傷を負う不安がある。トイレの近い人はケガをしない為には入り口で脱ぎっぱなしにせず、隠し持って歩くのが賢明かも知れない。

最後は変なオチ(落ち)となったが、ミャンマーはこれからインフラ需要が高まる国だ。観光地も遠距離で分散しており、都心の渋滞もひどい。これでは発展途上の経済が行き詰ってしまう。母社も既に拠点をおいて進出をもくろんでいるようだがベトナムでわかるようにアジアの途上国の発展のテンポは動き出すと速い。民主化を目指すミャンマーの発展に是非とも寄与して欲しい。

追記

ミャンマーだけレストランの紹介をしていなかったなので、印象に残った店を付け加えておきたい。

○ハウスオブメモリーズ

100年以上前に建てられたコロニアル様式の屋敷を改造したレストランでアウンサン將軍の執務室が残され、入室可能。料理はカレー中心の伝統的なビルマ料理。メニューは新聞紙調で作られている。

○カラウェイパレス

こちらは写真にも掲載した湖上に浮かぶレストラン。料理は和洋中のバイキングだが舞台では様々な演芸で楽しませてくれる。

どちらも予約が必要でホテルのフロントに予約を依頼した。少し距離があるので交通は市内からはタクシーを利用。

最後までお読みいただきありがとうございました。